

司式:増田多加子

奏楽:川上 妙子

前奏:「愛するイエスよ、われらはここに」(J.S. バッハ)

招詞:真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。(ヨハ16:13a)

讃美歌:51「愛するイエスよ」

交読詩編 43

- 01 神よ、あなたの裁きを望みます。わたしに代わって争ってください。あなたの慈しみを知らぬ民、欺く者/よこしまな者から救ってください。
- 02 あなたはわたしの神、わたしの砦。なぜ、わたしを見放されたのか。なぜ、わたしは敵に虐げられ/嘆きつつ行き来するのか。
- 03 あなたの光とまことを遣わしてください。彼らはわたしを導き/聖なる山、あなたのいますところに/わたしを伴ってくれるでしょう。
- 04 神の祭壇にわたしは近づき/わたしの神を喜び祝い/琴を奏でて感謝の歌をうたいます。神よ、わたしの神よ。
- 05 なぜうなだれるのか、わたしの魂よ/なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう/「御顔こそ、わたしの救い」と。わたしの神よ。

朗読聖書①ホセア書 6. 3-6

◆偽りの悔い改め(後半)

- 03 我々は主を知ろう。主を知ること追求めよう。主は曙の光のように必ず現れ/降り注ぐ雨のように/大地を潤す春雨のように/我々を訪れてくださる。」
- 04 エフラ임よ/わたしはお前をどうしたらよいのか。ユダよ、お前をどうしたらよいのか。お前たちの愛は朝の霧/すぐに消えうせる露のようだ。
- 05 それゆえ、わたしは彼らを/預言者たちによって切り倒し/わたしの口の言葉をもって滅ぼす。わたしの行う裁きは光のように現れる。
- 06 わたしが喜ぶのは/愛であっていけにえではなく/神を知ることであって/焼き尽くす献げ物ではない。

朗読聖書②マルコによる福音書 6. 14-20

◆洗礼者ヨハネ、殺される(前半)

- 14 イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」
- 15 そのほかにも、「彼はエリヤだ」と言う人もいれば、「昔の預言者のような預言者だ」と言う人もいた。
- 16 ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」と言った。
- 17 実は、ヘロデは、自分の兄弟フィロポの妻ヘロディアと結婚しており、そのことで人をやってヨハネを捕えさせ、牢につないでいた。
- 18 ヨハネが、「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」とヘロデに言ったからである。
- 19 そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。
- 20 なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである

祈祷

天地万物を創造し、永遠に私たちを導いてくださる主イエス・キリストの父なる神さま。聖名を崇め賛美いたします。御国を来たらせてください。聖霊降臨節

第6主日の朝、一人一人の名を呼び、またライブ配信を通じて主キリストの体である教会へと呼び集めてくださり、敬愛する兄弟姉妹と共に礼拝へと招いてくださる恵みに感謝いたします。

先の一週間を振り返り、神さまは人知を遥かに超えたあなたのご計画の中を歩む私たちを養い、導き、慰めの中にあつて豊かに祝福してくださいました。神さまの導きに感謝いたします。

それにも拘らず、神さまの御言葉に聞き従おうとせず、祈ることの少なかったことをどうぞお赦しください。私たちの歩みはあなたの御心に適ったものではなく、自分の目の前の私利私欲のことばかり考え、極めて愛の業に乏しいものでした。私たちは日々、神さまの赦しの中に置かれていることに気づき、私たちの思いを遥かに超えたところに神さまの導きと支えが豊かにあることに気づかせてください。

欠けの多い私たちであつて、あなたは私たちを見捨てることなく礼拝に招いてくださり、悔い改める機会をくださいました。そして御言葉を聞き、祈り、共に賛美する機会をくださいました。どうか一人一人の信仰を導き、信仰によって神の御業に聞き従う者としてください。

先の一週間を振り返りますと、世界はあからさまな偏見、差別が満ちています。弱者を狙った組織的な組織が横行しています。それによって事故に巻き込まれ、一瞬にして愛する家族の命が奪われ、悲しみの中にある家族が多くいます。その方お一人お一人の上に慰めがありますように。世の中において重責を担う方々のために祈ります。その方々が神さまの御旨に聞き従って歩むことができますよう、上よりのお支えをお与えください。

この礼拝を覚えつつも、この場に集うことのできない兄弟姉妹のために祈ります。病のため、仕事のため、介護のため、高齢のため、様々な理由でこの場に集えない方々のために祈ります。様々な困難の中にある友、深い悲しみの中にある友、孤独の中にある友、失望の中にある友、その方々の上にあなたの大きな恵みが豊かにありますように。自然災害によって避難を余儀なくされ、不自由な生活を強いられている者のために祈ります。その方お一人お一人の上に心の平安が訪れますように。

まだ信仰告白をされていない方のために祈ります。その方々お一人お一人が神さまの招きに応え、信仰を告白し、一日でも早く教会の肢となりますよう導いてください。ここに集う私たち一人一人が、この世へと派遣されている自覚をより一層強めてください。そして主日礼拝で説き明かしていただいた御言葉の恵みを、まだ教会に来たことのない方々に伝える勇気をお与えください。

各地で献げられている礼拝が賛美と感謝に満ちたものとなりますように。今日、御言葉を取り次いでくださる水谷勤先生の説教が、聖霊の力を豊かに受けて力強く語られますように。そして聞く私たち一人一人の心を清め、素直に受け止めることができますように導いてください。

今日から始まりますこの一週間を、あなたの恵みの中を歩ませてください。

このお祈りを、尊き主イエス・キリストの御名によって御前にお献げいたします。アーメン。

讃美歌:227「キリストよ、光の主よ」

説教 「人の迷いと主の真理」

水谷 勤

の主日も主の御手に守られまして、こうして礼拝に共に集うことができましたことを心より主に感謝しています。今日も共に御言葉に聞きたいと思います。与

たように、“神の思いを知る”ということ、“深きその思いに触れる”ということだと思います。預言者たち自身はそうにして神の驚い^{まこと}の思いについて触れ、それを知り、そして人々にもそれを知るようにと語りました。

特にホセアは北イスラエル出身でありましたが、エフライム、すなわち北イスラエル王国が滅びゆく中で、民全体とその状況、その行く末について深く憂え、深く根の部分から立ち返ることが必要なのだと語りました。また 4:1 にこうあります。「主の言葉を聞け、イスラエルの人々よ。主はこの国の住民を告発される。この国には誠実さも慈しみも、神を知ることないからだ」と。当時の時代潮流としては安易で場当たり的な考え、発言が満ちている中で、ホセアは危機、その危機を察知していました。“北のエフライムよ、なぜ滅んで良いだろうか。南のユダよ、なぜ滅んで良いだろうか。”そしてその言葉は、今日の私たちの分断された社会、分断された世界にも語られています。6 節に「わたしが喜ぶのは愛であって、いけにえではなく、神を知ることであって、焼き尽くす献げ物ではない」。最後にホセアはそうに言います。「いけにえ、焼き尽くす献げ物」とは、神殿の祭儀を意味しています。それらよりも“愛を行うこと、神を知ること”が最も大切だと言います。当時としてはその言葉自体は非常に革新的でありました。神殿の冒涇だと言われかねないほどの言葉です。

当時の状況としては、この御言葉は苦難の中で与えられた御言葉、北イスラエルが混乱し、そして付焼灼的な希望に人々が煽られる中で、本当に必要なことはこのことなのだ^{まこと}とホセアを通して示されたことでありました。またこの「わたしが喜ぶのは愛であっていけにえではない。神を知ることであって焼き尽くす献げ物ではない」、これは、新約聖書のマタイ福音書(9:13,12:7)にも出てきます。つまり主イエスの時代、そしてその直後、ローマに支配される中において、キリスト者たちはこの御言葉を大切にしていたことがわかります。特にエルサレム神殿が崩壊した時には、“この御言葉のみなのだ”と、唯一の拠り所と基をそこに置くようにと意識を向けることとなり、“いけにえではなく神の愛を知ること、動物の犠牲よりも神を知ることなのだ”と、“そのことこそ神さまが喜ばれる”ということを信仰の中心に置きました。

周囲が激動する中で、ことあるごとに何が大切であるか、その本質にとどまることを問われる御言葉ではないでしょうか。本質が問われ、そしてそれだけが残るということ。それを少し考えておりました。ふと思い出したのは、戦時中のドイツである牧師が「主の祈り」の説教を毎週した話であります。ヘルムート・ティーリケという牧師による説教で、『主の祈り——世界を包む祈り』という本を読まれた方もあるかもしれません。第二次世界大戦中のシュトゥットガルトの街でのこと。日々空襲に脅かされる状況で、この礼拝堂、場所を何度も変えなくてはならない状況で、この連続説教がなされます。ついにそれが終わる頃には、街には教会堂が一つも残っていなかったという状況です。それでも人々は毎週この『主の祈り』の説教を聞き、またこの『祈り』を祈り続けました。

今日はその本の内容には残念ながら触れられませんが、主の祈りは誰もがどのような状況でも祈ることができる祈りであり、そしてそのようにして世界を包む祈りであるというこの本には、当時の状況が記されています。起こったその様子、刻々と変わる周囲の現実を感じながら御言葉を聞く、そういうことが伝わってきます。建物と場所をうしない、逃れつつ、そして大空の下で礼拝を行うということで、何かより本質だけが残り、その中で礼拝していた様子が伝わってきます。当時 3000 人もの礼拝者が集まっていたと言い、そしてこの牧師自身も活動が制約される中で、“永遠の御言葉がその場に特別に力強さを示した”と振り返っています。人々が苦難の中において、その福音の真理に直接に触れるような時を与えられたのだと思うのです。

翻って私たちは、今現在、このように守られて礼拝を献げていますけれども、

しかし今一度思いを新たにして、私たちの置かれた状況の中で本質であること、つまり主のその御心に触れるということ、主を知るということに改めて心を砕き、心を込めることができるのではないのでしょうか。主への愛と慈しみ、その真理に立ち返ることを主イエスも説かれました。そのことに日々従い、私たちも今週の歩みを歩んでいきたいと願います。

お祈りをお献げいたします。

主なる御神さま、今日守られまして礼拝の御言葉と恵みに与かることができ、深く感謝いたします。

大きな震災や台風の被害の中、この聖日を迎えている地域の人々を主が顧みてください。全ての教会を今日、特に主が祝福をもって、御恵みを注いでくださいますこと、御言葉の御恵みを注いでくださいますことを心より感謝いたします。

私たちに対する主の揺るぎない愛と慈しみを、あの主イエスの十字架において示してくださったことを知る者とされた私たちです。はかり知ることのできない恵みに深く感謝いたします。御言葉に照らされ、私たちの、また私たちの社会が、いかに主から遠く離れているかということを思われます。どうか立ち帰り、主の慈しみに生きる者とならせてください。また国の指導者たちが、その咎を隠すことなく、主を知り、主を恐れ、それにより正しい判断を選び取っていくことができますように。この地を誤った道から守り、平和の道をお与えください。揺るぎない主の真実が、この地を導いてくださいますように祈ります。

日本の教会が主の御言葉を宣べ伝えていくことができますようにお支えください。信濃町教会の歩みを御前に覚え、教会を牧される佃先生のお働きが主に祝され、教会に連なるお一人お一人のご健康と信仰が、主の慈しみと揺るぎない真実によって支えられますように、今週も豊かにお守りください。

これらの祈りを、尊き我らの救い主、主イエス・キリストの御名によってお献げいたします。アーメン。

讃美歌 412「主 イエスの」

献金・感謝(氷上朋子)・主の祈り(讃美歌 21 93-5A)

天にいらっしゃいます父なる神さま、今日は天気が不安定な中、このように私たちを教会に招いていただきましてありがとうございます。またオンラインを通じて来られなかった皆さまにも礼拝を届けることができましたことを感謝いたします。

今、台風や地震などで多くの人々が不安な日々を過ごしていると思います。どうかその人たちの上にも、あなたのお恵みがありますように。

今、お献げしました献金を、どうぞあなたのご用のためにお使いください。あなたから教えていただきました主の祈りを一緒に唱え、一週間の歩みを始めさせていただきます。「主の祈り」…アーメン。

派遣：讃美歌 92「主よ、わたしたちの主よ」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の親しい交わりが、あなた方一同と共に、また私たちが心に留める一人ひとりの上に、限りなく豊かにありますように。アーメン。

報告：夏季献金のお願い(会計担当長老)

後奏：「高きにあります神にのみ栄光あれ」(J.L. クレプス)